

東日本大震災からの復興において 震災復興イベントが果たす役割の考察と提言

A consideration and a proposal to the role of revival events
held to recover the Great East-Japan earthquake disaster

3 年 23 組 5 番 石塚 楓

3 年 12 組 16 番 榊 知之

3 年 30 組 26 番 田中 芹奈

3 年 18 組 28 番 豊田 繫紀

3 年 19 組 27 番 服部 純奈

東日本大震災からの復興において
震災復興イベントが果たす役割の考察と提言

A consideration and a proposal to the role of revival events
held to recover the Great East-Japan earthquake disaster

東日本大震災からの復興において 震災復興イベントが果たす役割の考察と提言

A consideration and a proposal to the role of revival events
held to recover the Great East-Japan earthquake disaster

キーワード

ソフト面での復興 震災復興イベント 復興予算の流用

論文要旨

東日本大震災からの復興には、ハードとしての「まちなみ」という生活環境の再建だけでなく、その中で住民がどんな暮らしを営むかという問題に対応するソフト面でのまちづくりが必要である。人々が被災した近隣地域に再び集い、そこで生活を営むためには、そこに雇用やコミュニティが再生されなくてはならないからである。それを喚起させるためには、いくつかの方法があるが、そのうちの1つにたとえば、イベントを行うことで地元を離れた人々を呼び寄せ、地域との結びつきを再認識させ、関係を持続させようという発想がある。本稿では、東日本大震災からの復興活動の一環で行われているイベントの1つ、特定非営利活動法人アムダ（AMDA）が主催する復興グルメ F-1 大会をとりあげ、その活動のソフト面でのまちづくりにおける重要性に触れた上で、この大会の改善できる点を指摘する。さらに政府の復興予算に流用の例があることに着目し、その予算を使用することでイベントの改善が可能であることを明らかにする。復興グルメ F-1 大会を例として、NPO 法人が催す復興イベントへの復興予算の適切な運用により、ソフト面でのまちづくり、さらには震災復興を進められる可能性を探る。

目次

序章

第 1 章 震災復興におけるイベントの重要性

第 2 章 実証的研究

第 1 節 復興イベント参加者の意識調査

第 2 節 復興イベント開催者へのインタビュー

第 3 章 復興予算の現状

第 1 節 復興予算の流用

第 2 節 復興予算運用の提案

第 4 章 総括

序章

本稿での復興の定義は、震災によって離散した人々を被災地へと再び集め、震災後そこにとどまった人々と結びつけコミュニティを再生することであるⁱ。

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源に巨大地震が発生した。東日本の各地で大きな揺れを観測するとともに、海岸線に壁となって押し寄せた津波により多くの人命が失われ、東日本をはじめ、日本各地に甚大な被害をもたらした。マグニチュード9.0と発表された東北地方太平洋沖地震は、1994年の北海道東方沖地震の8.2、1995年の阪神淡路大震災の7.3を大きく上回る国内観測史上最大の地震となり、宮城県栗原市では震度7を記録した。太平洋プレートと北アメリカプレートの境界で起こったこの海溝型地震は、震源域が岩手県沖から茨城県沖までのおよそ南500km、東西200kmという広大なものであったⁱⁱ。これまで想定されていた地震の規模を、大きく上回る巨大地震であったⁱⁱⁱ。地震に伴って発生した大津波は、北海道から関東の太平洋沿岸へ押し寄せ、漁船、港湾施設、さらに住宅地や農地を呑み込み、大きな被害をもたらした^{iv}。死者と行方不明者の合計は2万5,949人であり、関東大震災の10万5,000人あまりに次ぐものであった。また、津波により冠水した面積は宮城県、福島県など6県で561km²（山手線の内側面積の約9倍）におよぶとみられている。多くの尊い命とともに家屋や産業に大きな傷跡を残した東日本大震災の被害規模は、16兆～25兆円にのぼると政府は試算している。避難者数は約29万8,000人であり、また最も死者の多かった宮城県では死者は8,745人にのぼる。家屋には、全壊126,458戸、半壊272,198戸の被害が出ている。チリ地震、プリンス・ウィリアム湾地震、スマトラ沖地震に次いで、世界的にも1900年以降4番目の規模の地震である。

復興の現状として、復興庁の発表では、仮設住宅等への入居戸数は減少して恒久住宅への移転が始まりつつあり、沿岸市町村を中心に被災3県の人口推移は2012年4月以降、減少傾向にある。被災者の多くが避難所から仮設住宅等に

移行し、コミュニティの弱体化や被災者の孤立が問題となっている。また、被災3県の雇用情勢は全体として落ち着いてきているものの、沿岸部については震災前の水準まで回復していない。

被災自治体は、復興を本格的に軌道に乗せ、震災前かそれ以上の地域再生を図ることを目指している。しかし、産業振興はおろか、住民の住宅確保、インフラ整備もままならず、特に東京電力福島第一原発事故の被害に苦しむ福島県では、復旧すら進んでいないのが現状だ。

第1章 震災復興におけるイベントの重要性

阪神淡路大震災では、震災によって人間関係としてのコミュニティが崩壊し、改めて「コミュニティ」の重要性が明らかになった。似田具香門氏によると、復興まちづくりの過程からコミュニティ活動の活性化を見てとれるケースがあるという^v。震災以前から意識的、組織的に「まちづくり」を展開していた地域は震災後の立ち上がりが早かった。一方、行政的に義務的に活動を営んでいただけの町内会・自治会の場合は、すぐに復興に向けての緊急の体制が整わないという状況であった。例えば、野田北部地区では、もともと住んでいた住人が1人でも多く地区に戻れるようにしよう、それなくして人口回復・活性化という震災以前からの復興もありえないという認識を持っていたと言われている。野田北部地区はハードとしてのまちづくりは完了したが、その中で住民がどんな暮らしを営むかという問題に行き当たり、ソフト面でのまちづくりに焦点をシフトしていく必要があった^{vi}。野田北部地区は、もとい住民が可能な限り戻ってこられるまちづくりを進めるという方針のもとに、土地問題などで問題を抱えている人を対象として専門家による「よろず相談会」や、コンサート、サーカス、大道芸などが催された文化祭や、商店街によるスタンプラリー「だんじり練り歩き」などといったイベントを催すことでコミュニティの形成を促し、ソフト面でのまちづくりを行った。^{vii}ハード面の条件が整ったとしても、

もといった住民が必ずしも戻ってくるとは限らない。もとの場所に住宅を再建するためには経済的条件・権利関係・投資効果などの諸条件が整う必要があるが、それに加えて従前居住地に戻りたいという積極的な精神的動機づけも必要である。避難で地区を離れている人は新たな居住地での生活が長期化すればするほど、もとの居住地区との関係が薄れてしまうのである。そこで必要となるのが、イベントを行い、それを口実に地元を離れた人々を呼び寄せ、地域との結びつきを再認識させ、関係を持続させようという発想である^{viii}。

現在、このようなイベントは十分な質で開催されているのかどうかを調査し、できていないのであれば、改善する方法を提案することが本稿の目的である。

東日本大震災からの復興を目指すイベントには、届けよう東海実行委員会が主催する「届けよう！東海から元気を！！」、NPO 法人 High-Five が催す「わくわくワンダースクールうらと自然体験合宿 2013」、NPO 法人ファイブブリッジなどが催す「MIYAGI AID 宮城復興イベント in 銀座～いぎなり、がんばっぺ東北」、商工会青年部復興祭 2012 実行委員会が主催する「宮城県商工会青年部復興祭 2012」、NPO 法人みちのく復興の会が主催する「相川七瀬 復興支援コンサート」など、様々なものがある。

本稿ではそのなかでも、被災地間が情報や知恵を共有することで復興への協力体制をつくることを目的とするソフト面でのまちづくりを目指すイベントであること、被災地で行われるイベントであること、3 ヶ月ごとの開催が守られていて継続性があること、政府ではなく NPO が主催するものであることを考慮し、復興グルメ F-1 大会（以下 F1-GP とする）を震災復興イベントの一例として取り上げることにした。

F1-GP とは、特定非営利活動法人アムダ（AMDA）^{ix}と被災地の様々な商店街が主催する、被災地の現状を発信するとともに各被災地間が情報や知恵を共有することで新たな復興への協力体制を形成することを目的としたプロジェクトで、被災地の各商店街がご当地の食材で「復興グルメ」を調理、販売し、「復興グルメ」の No. 1 を決定するものである。

F1-GP の現状を把握し、ソフト面でのまちづくりを支えるイベントとしての

十分な質が確保できているかどうか、できていないとすればどうすれば解決できるのかを調査するため、実地調査としてアンケートとインタビューを行った。次章では、そのアンケートとインタビューの結果とそこから読み取れる情報をもとに、F1-GP、さらには震災復興イベントの問題点を探る。

第 2 章 実証的研究

第 1 節 復興イベント参加者の意識調査

私たちは NPO 法人アムダの協力を得て、2013 年 7 月 21 日(日)午前 11 時 00 分～午後 3 時 00 分の間、宮城県石巻市鮎川浜にて開催された第三回 F1-GP にてその来場者にアンケートを実施し^x、男性 48 名女性 65 名の計 113 名分の有効回答を得た。サンプルの構成要素は図表 1 で示すとおりである。

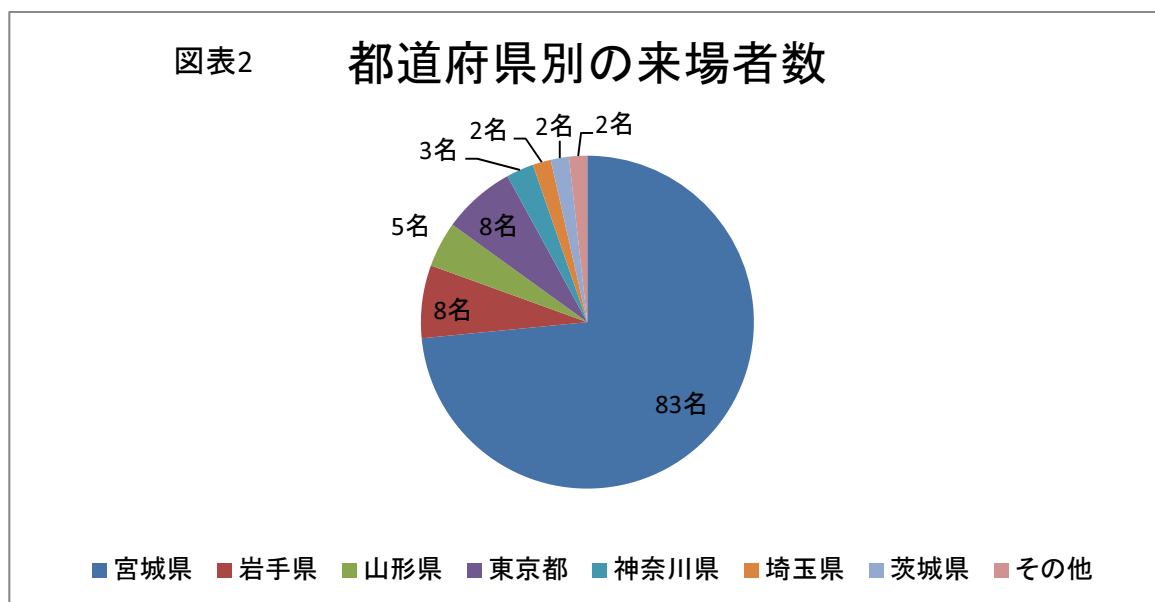
図表 1 サンプル構成

年代	人数(人)	男(人)	女(人)
10 代	13	7	6
20 代	14	5	9
30 代	26	12	14
40 代	34	13	21
50 代	17	7	10
60 代	6	3	3
70 代以上	3	1	2
合計	113	48	65

2013 年 7 月 21 日(日)午前 11 時 00 分～午後 3 時 00 分の現地におけるアンケート調査より

アンケートの質問項目は、F1-GP の現状と問題点を把握するために、性別、年齢、出身地、F1-GP をどこで知ったか、なぜ F1-GP に参加したか、F1-GP に参加してみて次回も参加したいと思えたか、復興イベントをもっと開催してほしいか、東日本大震災の復興は思っていたより早かったかまたは遅かったか、どうすれば F1-GP の来場者が増えると思うかを問うものとし、最後に良かった点と改善すべきだと思う点についての自由記入欄を設けた。

アンケート回答者の 70% 以上は宮城県内からの来場者であり、山形県・岩手県からの来場者を合わせると東北地方からの参加者が 85% を占める。都道府県別の来場者数は図表 2 に示すとおりである。

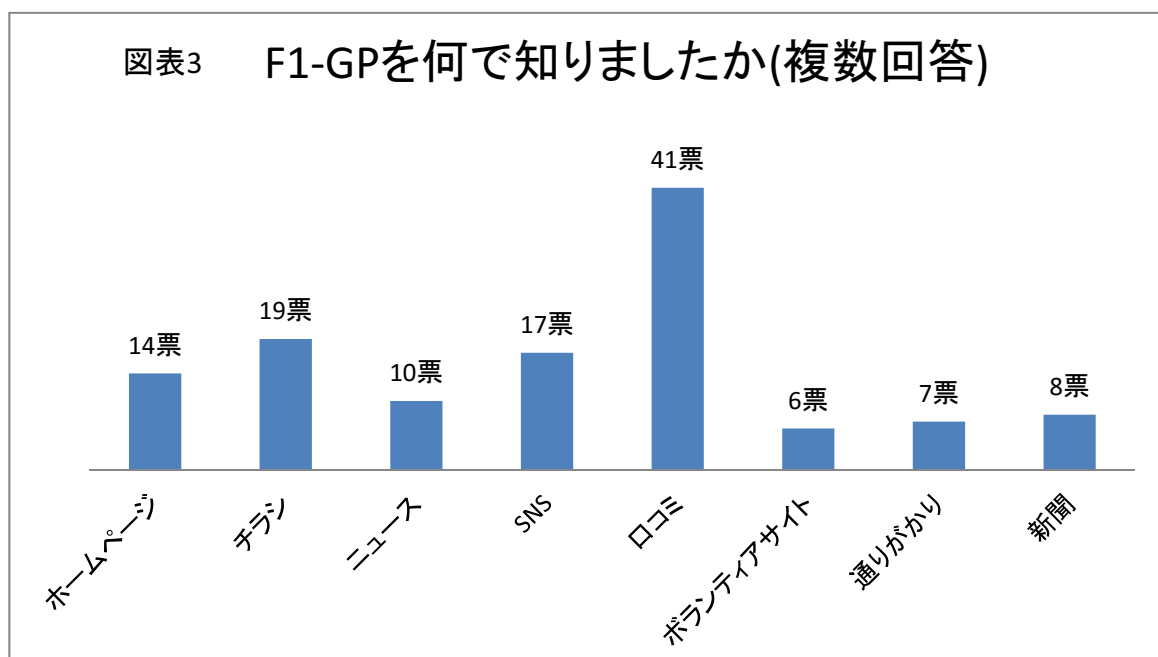


2013 年 7 月 21 日(日)午前 11 時 00 分～午後 3 時 00 分の現地におけるアンケート調査より

今回の F1-GP に参加した理由としては「復興に向けての一步として」という声が多く、震災復興イベントへの参加者の期待が見て取れる。「近所でやっていたから」との回答も 20%を超えており、被災地の近くで開催することで地元の方は足を運びやすくなることが分かった。そして、次回もまた参加したいと感じた人が大多数を占めたことから、F1-GP は多くのリピーターを持てる

魅力的なイベントであるといえる。「F1-GP のような復興イベントをもっと開催してほしいと思いますか」の問いには回答者全員が「そう思う」と回答し、震災復興イベントに大きな需要が存在することが明らかになった。また、東日本大震災の復興スピードについては遅いと感じている人が多かった。

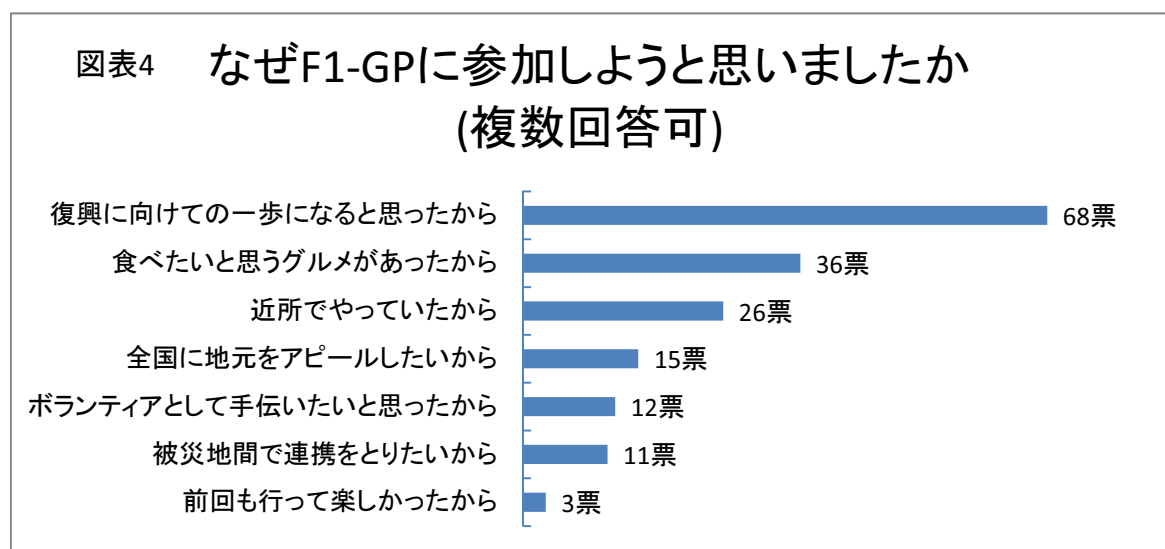
「あなたはこの F1-GP を何で知りましたか」という質問に、「口コミで」という答えが 41 票、次に「チラシで」が 19 票集まった。この質問への回答は図表 3 に示すとおりである。口コミやチラシといった地域内での伝達が約 5 割を占めており、他の地域にあまり広まってないことが分かる。地域外への広報が足りず、また交通の便があまり良くないところなのでその地域内でしか話題性が無く、離散してしまった住民へのアピール力に欠けていると言える。



2013 年 7 月 21 日(日)午前 11 時 00 分～午後 3 時 00 分の現地におけるアンケート調査より

さらに、「あなたはこの F1-GP の来場者をもっと増やすにはどうしたらいいと思いますか」という質問において、「広報に力を入れる」が 80 票、「もっと交通の便がいいところで開催する」が 25 票投票されていた。広報の足りなさを指

摘する声の多さが分かる上に、被災地での開催に力を入れるため交通の便が悪くなる場合があることも、より地域外への強力なアピールの必要性を増す要因となっている。この質問の回答は図表 4 に示すとおりである。



2013 年 7 月 21 日(日)午前 11 時 00 分～午後 3 時 00 分の現地におけるアンケート調査より

イベントの問題点としては、広告などでのイベントのアピール不足や開催地への交通の便の悪さなどを指摘する声が多かった。

さらに、復興予算は建物の再建だけではなく F1-GP のようなイベントに使い、ソフト面の復興を強化すべきだと考えている参加者もあり^{xi}、今以上にソフト面の復興を目指す取り組みを強化していくことが実際に望まれているといえる。

以上がアンケートの結果から読み取られた情報である。次節では同じく F1-GP に際して行ったインタビューから得られた情報について見ていく。

第 2 節 復興イベント開催者へのインタビュー

F1-GP 主催である NPO 法人アムダの大政朋子さん (AMDA プロジェクトオフィサー東北担当) にインタビューのアポイントを取ったところ快諾してくださった。さらに、大政さんは F1-GP の発案者である坂本正人さん (気仙沼復興商店街副理事) を紹介してくださり、私たちは坂本さんにもインタビューを行うことができた。

2013 年 7 月 21 日 (日) 午前 9 時 21 分から約 15 分にわたるインタビューを坂本正人さんに行った。発案者である坂本さんはこのイベントによって他の地域の人々を呼び込み、被災地の状況や環境、そして人々の明るさや元気な姿を見てもらいたいという意図を持っている。地元の人以外にも来てほしいかという質問に対して、気仙沼は人工的には 7 割減ったため、地元の人だけではなく他の地域の人々にも来てもらい、少しずつでも人が戻ってきて欲しいと思うと仰っていた^{xii}。しかし、アンケートの結果にあったようにイベントの情報は地域内でしか発信できておらず、被災地の現状や人々の元気な姿を離散してしまった住民達に見せることができていない。

また、2013 年 7 月 20 日 (土) 午後 9 時 00 分から約 1 時間にわたり行った大政さんへのインタビューでは、F1-GP に関してはアムダからは経費として 30 万円程しか出せず、政府からの補助金はないという状況であることが分かった。NPO 法人アムダや出店者の方々は広告の手段について、大々的な HP を持つことが望ましいと考えながらも、復興予算が商店街に入ってくることはないためコストのかかる広告での情報発信は難しく、現時点での主な PR は Facebook などで行う形をとっていることも分かった^{xiii}。

アンケートとインタビューから、F1-GP はリピーターを持てるような魅力的なイベントであり、来場者から復興への一歩となる期待を持たれながらも、地域外の人々へのアピールという広告面で大きな問題を抱えていること、さらにその問題を解決するための予算が無いということが判明した。

この問題を解決するための予算を震災復興予算で補助することはできないのか、震災復興予算に流用の例があることに着目し、次章で論ずる。

第3章 震災復興予算の現状

第1節 復興予算の流用

東日本大震災からの復興関連予算^{xiv}が被災地と関係の薄い事業に使われていたことが大きな問題になっている。沖縄での道路整備や調査捕鯨への支援、北海道と埼玉県の刑務所での職業訓練など、復興事業として疑問を持たれる事業が明らかになり、国民から批判が高まった^{xv}。アジア大洋州、北米地域との青少年交流（外務省）では、事業費として1万1,425人に72億4,700万円が使用されているが、被災地でのプログラムは2日間程度であった。また、鯨類捕獲調査安定化推進対策（農水省）では反捕鯨団体の妨害活動に対する安全対策の強化として22億8,400万円が使用されている^{xvi}。被災地の宮城県石巻市が国内有数の捕鯨基地であることなどが勘案されて予算が認められたが、「復興」との関連性では苦しい説明が続き、経済効果についても佐々木隆博農水副大臣は「数字で示すのは困難」と述べるにとどまった。12年度、13年度は通常予算で計上していることも説明し、「便乗予算」であることを半ば認める形ともなった。このほか、北海道と埼玉の刑務所での職業訓練事業について、「訓練を受けた受刑者の7割が被災地での就労を希望したため、（昨年秋の補正予算で）予算計上した」（山花郁夫法務副大臣）と説明したものの、その調査自体が今年10月に入ってから実施していたことが露呈。身内の民主党からも「違法と言ってもいいぐらい、たちが悪い」（階猛衆院議員）と批判される場面もあった^{xvii}。ほかにも、FC岐阜のPR、鳥取県ご当地アイドルのPR、北海道でのワインとチーズを組み合わせた食文化と観光のブランド化、山口県でのゆるキャラ「ちょるる」によるPR隊結成、三重県でのインターネットや携帯電話の安全な利用を呼びかけるリーフレット作成など、数多くの被災地と関係の薄い事業に復興予算が使用されている^{xviii}。

平野達男復興相は、9月中旬の定例記者会見で、「増税をして財源を確保した

ものも使い道としてはいかなものかという感想がある」と述べ、一部に復興事業として不適切な支出があったことを認めた^{xix}。

第 2 節 復興予算運用の提案

第 1 節で論じたように、震災復興予算は非常に多くの額が流用されている。前述の通り NPO 法人アムダは F1-GP に関して 30 万円の経費で賄っているが、例えば反捕鯨団体の妨害活動に対する安全対策の強化として使用された 22 億 8,400 万円のうち 1,000 万円でもこのイベントに回すことができれば、およそ 33 倍の広告費等経費の使用が可能になる。流用されている復興予算を NPO 法人アムダへの補助へと回し F1-GP の補助に使用することができれば、より多額の広告費を使用することができ、F1-GP の抱えている問題の 1 つを解決することができる。F1-GP には広告の問題以外にも、交通便の悪さなどの問題点があったが、これに関しても NPO 法人アムダに補助金を出すことで送迎バスを手配するという対策をとることができる。このように、広告の問題に限定せずとも、さらには F1-GP に限定せずとも、震災復興イベントを開催する NPO 法人等の団体に復興予算による補助を行うことで震災復興イベントの抱える様々な問題を解決することができる。様々な問題とは、震災復興イベントがソフト面での復興の支えとなるにあたっての問題のことである。つまりこういった問題を解決することは、震災復興イベントの効果を高め、ソフト面での復興を進めることに繋がる。

そこで私たちは、復興予算の流用を防ぎ、その分の予算を、震災復興イベントを行っている NPO 法人の補助金として充てることを提案する。

第四章 総括

先にも述べたとおり、復興には経済的条件・権利関係・投資効果などのハードとしての諸条件が整う必要があることはもちろん、従前居住地に戻りたいという積極的な精神的動機づけが起こるようなソフト面でのまちづくりに焦点を当てる必要がある。そのために被災地を離れた人々を呼び寄せ、地域との結びつきを持続させる効果のあるイベントをその土地で行うという試みがある。しかし、地域外へと離散した人々にそれらのイベントの情報発信を通じて被災地の現状や人々の元気な姿を見せようとも、予算が無いため外部に向けた広告などに十分に経費をかけることができないのが現状である。そこで提案したのが被災地と関係の薄い事業に使用されている復興予算を、震災復興イベントを行っている NPO 法人の補助金として充てることである。これにより復興予算の流用を防ぎつつ、震災復興イベントの効果を高めることができ、それがソフト面での復興を進めることに繋がる。

このようにハード面でのまちづくりを進めるとともにソフト面のまちづくりも重視することで、被災者にとって物理的な意味でのホームを作ることはもちろん、精神的な意味でのホームを作る。これこそが被災地の本当の意味での復興に繋がるのである。

-
- i 似田具香門著『自立支援の実践知～阪神淡路大震災と共同市民社会～』東信堂、2008年2月8日、48頁。
 - ii 樋口 祐治著 東日本大震災における被害状況と復旧・再構築に係わる研究開発（特集 地震・津波の研究と防災の取組）「電気評論」97巻7号18-22頁。
 - iii 同上書、18-22頁。
 - iv 同上書、18-22頁。
 - v 似田具香門著、前掲書、158頁。
 - vi 似田具香門著、前掲書、181頁。
 - vii 似田具香門著、前掲書、178頁。
 - viii 似田具香門著、前掲書、177頁。
 - ix AMDA（アムダ）-救える命があればどこへでも- <http://amda.or.jp/>（情報最終確認日 2013年9月25日）
 - x 本稿 pp.14-16 にて質問票を掲載する。
 - xi 2013年7月21日（日）午前11時00分～午後3時00分の間、第三回 F1-GP にて来場者を対象に行ったアンケート
 - xii 2013年7月21日（日）午前9時21分から約15分間、F1-GP の発案者である坂本正人さんに行ったインタビュー
 - xiii 復興グルメ F-1大会 Facebook <https://www.facebook.com/fukkogourmet>

(情報最終確認日 2013 年 9 月 18 日)

xiv 復興予算は、震災からの復旧・復興に使うための政府予算で、12 年度に新設された「東日本大震災復興特別会計」で管理されている。11 年度からの 5 年間で 19 兆円を予定しているが、12 年度までにすでに 17 兆円以上に達している。主な財源は復興増税で、所得税は 13 年 1 月から 25 年間、住民税は 14 年 6 月から 10 年間はそれぞれの税目に一定の割合額が上乗せされることになっている、鈴木利明著「復興予算、「流用」明らかに～被災地と無関係な事業が横行、求められる被災地への長期支援」『地方財務』702 号，株式会社ぎょうせい，2012 年 12 月，51-57 頁。

xv 同上書，51-57 頁。

xvi 『「復興予算使い込み流用事件」に見る被災地を無視した官僚のやりたい放題を許したら国民の命と暮らしが確実に破壊される！』

<http://etc8.blog83.fc2.com/blog-entry-1701.html> (情報最終確認日 2013 年 6 月 13 日)

xvii 鈴木利明著，前掲書，51-57 頁。

xviii 「復興予算 雇用でも流用」『朝日新聞』2013 年 6 月 3 日付 朝刊

xix 鈴木利明著，前掲書，51-57 頁。

～参考文献～

・ 似田具香門著『自立支援の実践知～阪神淡路大震災と共同市民社会～』東信堂，2008 年

・ 震災対応セミナー実行委員会編『3.11 大震災の記録：中央省庁・被災自治体・各士業等の対応』民事法研究会，2012 年

・ 日本経済新聞社編『震災復興：日本経済の記録』日本経済新聞出版社，2012 年

・ Roger Musson, *The million death quake: the science of predicting earth's deadliest natural disaster* New York: Palgrave Macmillan, 2012

・ 読売新聞東京本社『東日本大震災：1 か月の記録：2011 年 3 月 11 日～4 月 11 日：読売新聞特別縮刷版.』読売新聞東京本社，2011 年

・ 和田章『科学的によくわかる地震読本：阪神淡路大震災の記録』新風書房，1996 年

・ 鈴木利明「復興予算、「流用」明らかに～被災地と無関係な事業が横行、求められる被災地への長期支援」『地方財務』702 号，株式会社ぎょうせい，2012 年 12 月，51-52 頁。

・ Jeff Kingston, *Natural disaster and nuclear crisis in Japan: response and recovery after Japan's 3/11* Milton Park, Abingdon, Oxon: Routledge, 2012

・ 「復興予算 雇用でも流用」『朝日新聞』（朝日新聞社）2013 年 6 月 3 日付朝刊

・『農林水産省/東日本大震災 地震と津波の被害状況』
http://www.maff.go.jp/j/pr/aff/1105/spe1_01.html (情報最終確認日 2013 年 8 月 27 日)

・『復興庁/復興の現状と取組』
http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat7/sub-cat7-1/20130704_san-ko01.pdf (情報最終確認日 2013 年 8 月 27 日)

・『東日本旅客鉄道株式会社 仙台支社』 <http://www.jr-sendai.com/operation>
(情報最終確認日 2013 年 8 月 27 日)

・『復興グルメ F-1 大会 Facebook 』<https://www.facebook.com/fukkogourmet>
(情報最終確認日 2013 年 9 月 17 日)

・『「復興予算使い込み流用事件」に見る被災地を無視した官僚のやりたい放題を許したら国民の命と暮らしが確実に破壊される!』
<http://etc8.blog83.fc2.com/blog-entry-1701.html> (情報最終確認日 2013 年 6 月 13 日)

アンケート

私たちは明治大学商学部若林ゼミナールの3年生です。現在明治大学主催の奨学論文のテーマとして「震災と復興イベントについて」を研究しています。この研究調査データとしてF-1グランプリの実情についてアンケートを実施させていただきたいと思います。つきまして、以下のアンケート用紙にご回答いただきたくお願い申し上げます。

① まずあなた自身のことを教えてください。

・あなたの性別についてどちらかを○で囲んでください。 (男 / 女)

・あなたの年齢についてあてはまるものを○で囲んでください。

(10 / 20 / 30 / 40 / 50 / 60 / 70 / 80 / 90 代)

・あなたはどちらからお越しになりましたか。

(_____ 都道府県 _____ 市町村)

② 次に、F-1 グランプリと復興について質問です。

・あなたはこの F-1 グランプリを何で知りましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

ホームページ () Facebook、Twitter などの SNS ()

チラシ () 友人などからの口コミ ()

TV のニュース () ボランティア関連のサイト ()

その他 (_____)

・あなたはなぜこの F-1 グランプリに参加しようと思いましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

近所でやっていたから ()

食べたいと思うグルメがあったから ()

ボランティアとして手伝いたいと思ったから ()

復興に向けての一步になると思ったから ()

被災地間で連携をとりたいから ()

前回も行って楽しかったから ()

全国に地元をアピールしたいから ()

その他 ()

- ・あなたはこの F-1 グランプリに参加してみて、次回も参加したいと思いましたが。

(YES / NO)

- ・あなたは F-1 のような復興イベントをもっと開催してほしいと思いますか。

(YES / NO)

- ・東日本大震災の復興はあなたが思っていたよりも早いですか、遅いですか。

(早い / 遅い)

- ・あなたはこの F-1 グランプリの来場者をもっと増やすにはどうしたらいいと思いますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

グルメの数を増やす ()

メディアに取り上げてもらうなど広報に力を入れる ()

もっと交通の便が良いところに開催場所を設定する ()

開催回数を増やす ()

その他

()

・あなたが F-1 グランプリについて良かった点や改善してほしいと思った点、感想など自由にお書きください。

()

ご協力ありがとうございました。

* 記入によって得られた必要最低限の個人情報は目的外に使用することはなく、私たちの論文以外に使用することはありません。